ドストエフスキー裁判

Достоевский в процессе петрашевцев

ペトラシェフスキー・サークル事件は四年間の流刑の単なる入口だったのではない。ドストエフスキーが同じような境涯の知的青年たちと出会い、自分たちが共に負っている問題とは何であるかを知り、暗い穴の中から自分たちを引き出してくれる明るい西欧の思想に導かれ、そして思想は人生という代価によってあがなわれるのだという真実をはじめて知ったのは、ペトラシェフスキー・サークル事件においてである。西欧の進歩思想はロシアの知的青年の目にどれほど輝かしい希望の教えと映るか、革命のための条件など何一つ整っていない状況で革命という目標を目指すロシアの若者は、何に衝き動かされているのか。自分たちは何にあこがれ、何を怖れているのか。自分たちは単に未熟にすぎないのか。それとも真実へ向かって邁進しているのか。そうした問いが、具体的個人の姿をとって生々しく立ち現われていた場がペトラシェフスキー・サークルであり、そこにいた若いドストエフスキー自身も、そうした「思想を生きよう」とするロシアの青年の一人であった。（「訳者あとがき」より）

N・F・ベリチコフ 編
中村健之介 編訳

北海道大学図書刊行会

ドストエフスキー裁判

Достоевский в процессе петрашевцев

ペトラシェフスキー・サークル事件は四年間の流刑の単なる入口だったのではないか。ドストエフスキーが同じような境遇の知的青年たちと出会い、自分たちが共に負っている問題とは何であるかを知り、暗い穴の中から自分たちを引き出してくれる明るい西欧の思想に導かれ、そして思想は人生という代価によってあがなわれるのだという真実をはじめて知ったのは、ペトラシェフスキー・サークル事件においてである。西欧の進歩思想はロシアの知的青年の目にとれほど輝かしい希望の教えと映るか、革命のための条件がどう整っていない状況で革命という目標を目指すロシアの若者は何に衝き動かされているのか。自分たちは何にあこがれ、何を価値いるのか。自分たちは単に未熟にすぎないのか、それとも真実へ向かって邁進しているのか。そうした問いが、具体的個人の姿をとって生々しく立ち現われていた場がペトラシェフスキー・サークルであり、そこにいた若いドストエフスキー自身も、そうした思想を生きようとするロシアの青年の一人であった。（訳者あとがきより）

N・F・ベリチコフ❖編　中村健之介❖編訳

北海道大学図書刊行会

トストエフスキー裁判
Достоевский в процессе петрашевцев
一九九三年一一月一〇日　第一刷発行

編者　N・F・ヘリチコフ
編訳者　中村健之介
装幀者　須田昭生
発行者　中村睦男
発行所　北海道大学図書刊行会
札幌市北区北九条西八丁目　北海道大学構内　郵便番号〇六〇
電話〇一一　七四七　二三〇八　振替小樽三　一七〇一一
印刷所　岩橋印刷
製本所　石田製本

ISBN4 8329 3191 1 ©1993 Kennosuke Nakamura Printed in Japan

凡例

一　この訳書『トストエフスキー裁判』は、N・F・ベリチコフ編『ペトラシェフスキー・サークル裁判におけるトストエフスキー』、ナウカ出版所、モスクワ、一九七一年（Н. Ф. Бельчиков. Достоевский в процессе петрашевцев. Издательство《Наука》, Москва, 1971）にもとづいている。訳者は、ベリチコフ編のこの原本を編み直し、ドストエフスキーに対する裁判の全体を時間の流れに従って鳥瞰できるようにし、注を書き加えた。

また、解説「ペトラシェフスキー・サークルの青年たち」を本文の前に掲げて、一八四〇年代のロシアの知識青年たちの世代的特徴を示した。

訳者によるこの再編集については、巻末の「訳者あとがき」を参照されたい。

二　翻訳において、括弧を次のように使い分けた。

1　（　）は、裁判記録原文中にある括弧、および編者ヘリチコフの注を示す。まぎらわしい場合は丸括弧内に、――ヘリチコフ、として、それがベリチコフによる注であることを明示した。

2　〔　〕は、訳者による注であるが、全体が訳者による新しい加筆である場合は、括弧は使わなかった。

3　最後のヘリチコフの「原編者による解説」においては、〔　〕は、引用文の出典を示す。

三　人名の名（イーミャ）や父称（オーチェストヴォ）を示す頭文字などは、便宜上、ロシア文字を

ローマ字に置き替えて表した。

四　なお、文中の「ペトラシェフツィ」とは、「ペトランェフスキー・サークルのメンハーたち」のことである。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

ドストエフスキー裁判※目次

凡例

解説　中村健之介

ペトラシェフスキー・サークルの青年たち

記録

❶――秘密警察「第三課」の、ドストエフスキー逮捕命令　47

❷――逮捕の朝　52

❸――ペトラシェフスキーの「金曜会」出席者名簿からの抜粋　59

❹――予備審問に対するドストエフスキーの釈明書　72

❺ トストエフスキーか所蔵した本についての文書調査委員会の報告書 135
❻ トストエフスキーの退役証明書とコリーノィン公爵の送り状 146
❼ 諜報員アントネリーの報告 151
❽ 証人たちの証言 162
❾ 被告人の供述 166
❿ トストエフスキーに対する人定審問 172
⓫ 公式審問に対するトストエフスキーの供述……178
⓬ 他の事件関係者についての記録に含まれているトストエフスキーの供述
⓭ アポロン・マイコフの手紙と談話 262
⓮ 退役工兵中尉トストエフスキーに関する記録抜粋 287
⓯ 退役工兵中尉トストエフスキーに関する軍法会議の決定 301
⓰ 軍法会議におけるトストエフスキーの宣誓書 316
⓱ 法廷における陳述 318
⓲ 判決 320
⓳ 最高軍法会議の決定と皇帝の裁可 323

⑳ ――兄ミハイル宛の手紙――死刑執行の日 342
㉑ ――トストエフスキーの護送に関する命令 366
㉒ ――トストエフスキーの護送出発の報告 367
㉓ ――名簿 371

原編者による解説　N・F・ベリチコフ
トストエフスキーとペトランェフツィ

訳者あとがき 503

人名索引

解説 ❖ 中村健之介

ペトラシェフスキー・サークルの青年たち

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

秘密警察「第三課」の逮捕指令からはしまるトストエフスキーのペトラシェフスキー・サークル事件関係の記録を読む前に、ペトラシェフスキー・サークルとはとのような人々の集まりであったのか、おおよそのイメーシを得ておくことにしたい。

一　一八四〇年代後半のロシアのサークル文化

一八二五年末デカブリストの蜂起を圧伏して帝位についたニコライ一世は、軍隊と官僚と秘密警察と地主貴族の力をかりて国を「無事」に治めてきた。その上からの力に抑えられた「平穏」か二十年間も続いて、ロシアの首都ペテルブルクは、一八四〇年代の後半、いわば活気のこもった閉塞状況にあった。

ペテルブルクの、勤め先の官庁では気の乗らない仕事を与えられてだらだらと時間をつぶしている知識青年たちは、「またいささか社会的活動を恐れ」ながら、いわば内側にしか扉のない小部屋のような仲間同士の集まりを次々と作って、そこで熱気を発散していた。

一般に「ペトラシェフスキー・サークル」と単数で言われ、私もそう書いてきたのであるが、このサークルが一つぽつりと孤立してあったわけではない。一八四〇年代後半のロシアの首都では、書物を読んだり社会のあり方を語ったりする知識人の交遊は、個人のアパート（クワルチーラ）や別荘で開かれる一種の同好の士の集まり、サークルという場でなされていたのである。ドストエフスキーはそのことを諧謔の口調で次のように語っている。

「われわれはサークルというものを愛用している。それところか、ペテルブルク全体かおびたたしい数の小さなサークルの集合体にほかならないことは周知の事実である。それは、ある面では、まだいささか社会的活動を恐れて内に引っ込みたかる、わが国民的性格から生まれたものである。サークルの中なら、何のわすらいもなく、うっとりとしたまま、あくびとうわさ話にかこまれて、有益な人生の時を過ごすことかできる。

もっとも、ましめなことをさかんに議論するサークルもある。教養のある、思想穏健な人ひとが何人か熱意を持って集まり、うわさ話やトランプあそひといった罪のない娯楽は断固しりそけて、不思議なほどの熱中ふりて、さまさまな重大問題を論しるのである。やがて、

議論しつくし、しゃべりつくし、いくつかの公共の利益にかかわる問題に結論を出し、あらゆることに関して互いにそうだと納得がいくまで語り合うと、なぜか、サークルの全員が、ある苛立ちにおそわれ、不快な無力感に陥っていく。そして、ついには、みんなが互いに腹を立て、いくつかのごまかしようのない真実か語られる。」(『ペテルブルク年代記』、一八四七年)

ペトラシェフスキーのサークルもまた、そういう「おひただしい数の」サークルの中の、「ましめなことをさかんに議論するサークル」の一つなのであった。

そして、メンハーの数が多く活発な活動をしているペトラシェフスキーのサークルを中心として、そのまわりにさらに衛星のようにいくつもの小サークルがあって、ペトラシェフスキーのサークルに加わりなから別の小サークルにも顔を出している者たちがたくさんいたし、一つのサークルが解消して元のメンハーが少し変わってすく新しいサークルか生まれるというふうに、サークルは縦横につながっていた。それらの複数のサークル全体で、いわば「ペトラシェフスキー・サークルズ」をなしていたのである。

「ペトラシェフスキー・サークル事件」あるいは「ペトラシェフスキー事件」と言うとき、大抵は、ペトラシェフスキーのサークルを中心としたこの十以上の「サークルス」全体を巻き込んた検挙と裁判の事件をさしている。

文学事典てはこの事件での逮捕者は三十四名（三十三名としている事典もある）となっているか、これは一八四九年四月二十三日未明に逮捕されたペトラシェフスキーのサークルを中心とする逮捕者てあって、警察から嫌疑をかけられて召喚を受けた者たちは、複数の「サークルス」全体では二百人以上（ソ連の『大百科事典』ては二百八十人）にものぼる。逮捕や召喚はされないてすんたかとこかのサークルにいわは訪問客のように一時的に参加していた「シンパ」を入れて数えれば、「ペトラシェフスキー・サークルズ」のメンハーは五百人から八百人にもなると見られる。レフ・トルストイのようなおよそ「サークル」とは縁遠い人ても、ペトラシェフスキーのサークルには参加してはいなかったが、その「サークルス」の一つには出入りしていた。それほどの広がりかあったのである。ペトラシェフスキー・サークルの捜査にあたった内務省の将校リプランチーか、このサークルは「相当広い、強力な基盤」を持っていると言ったのは、そういう意味たったのてある。

ではとのような「サークルス」かあったのたろうか。

文壇にテヒューしたばかりの二十五歳のドストエフスキーかはしめて入っていった文学者たちの集まりは、ヘリンスキー、パナーエフ、ソロクープ伯爵なとの家のサークルであった。これらのサークルはペトラシェフスキーのサークルの「衛星」サークルではない。

しかし、他人の批評に過敏な若いトストエフスキーは、先輩格の文学者の多いこれらのサーク

ルの雰囲気になじむことができなかったようである。このサークルで彼は、自分は軽蔑されているのではないかという「恐るへき猜疑心」にとりつかれてしまって、異常に緊張していた。また、ネクラーソフやツルゲーネフといった世馴れた連中は、自意識過剰で神経過敏になっているドストエフスキーをからかって、おもしろがった。「文学の鼻にぽつんと出たにきび」というのが、彼らかトストエフスキーにつけたあだ名である。ドストエフスキーは、財産、教養、才能、容姿、あらゆる点で自分をはるかに上まわるツルゲーネフにはげしい羨望と劣等感をいだいて、自作『分身』の主人公ゴリャートキンと同しように、傍目には滑稽なほとてあったが、七転八倒の苦しみをなめた。

1　ベケートフのサークル

ベリンスキーとの交際はまだ続いてはいたけれど、トストエフスキーか新たに加わったのが、ヘケートフ三兄弟を中心とした十五人ほどの若者たちのサークルてある。このベケートフのサークルには、すでに、ペトラシェフスキーのサークルに結びつく糸があった。

ベケートフ三兄弟の長男アレクセイは、ドストエフスキーと同しくペテルブルクの中央工兵学校で学んだ。次男アンドレイと三男ニコライはまだ大学生てあった。このサークルの中で仲間の尊敬を集めていたのは、若い批評家ウァレリアン・マイコフである。新進作家のトミートリー・

クリゴローウィチもここに出入りしていた。彼も中央工兵学校卒業で、トストエフスキー、ヘケートフとは学校時代からの友人であった。言動か反抗的たという理由でペテルブルク大学を一時放校になったことのある学生アレクサントル・ハヌィコフも常連てあった。ハヌィコフはペトラシェフスキーのサークルても活躍していた。トストエフスキーか短編『白夜』を捧げた親友、詩人のプレシチェーエフも、このヘケートフ・サークルのメンハーであった。そしてプレシチェーエフもペトラシェフスキーのサークルに関係していた。トストエフスキーはプレシチェーエフと一緒に街てペトランェフスキーに出会った。その出会いかきっかけて、ドストエフスキーはペトラシェフスキーのサークルを訪ねるようになったのである。

クリゴローヴィチはこのヘケートフ・サークルの雰囲気を、「発言者かたれてあれ、語られることが何てあれ、ペテルブルクの、ロンアの、外国の事件を取り上げて語るときも、文学や美学の問題を取り上げたときも、つねに、抑圧と不正に対する激しく、高貴な憤りか感しられた」と伝えている（『文学的回想』）。

トストエフスキーにとってヘリンスキー、ツルケーネフ、ソログープなととの関係はいわば一つ格か上の方々との交際てあって肩かはったようたが、このヘケートフ・サークルで知り合った仲間とは気か合ったようてある。「兄さん、ぼくは精神的にのみならす身体の面でも生まれ変わろうとしています。ぼくの内にこれほとの充足感と明朗感か湧いて、性格かこれほとまてに平らか

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c